

編 集 後 記

診療と研究に血となり、肉となる消化器専門誌をめざして出発した本誌も、読者の暖かい御支援により満1歳の誕生日を迎えることが出来た。2年目に入り、堂々廻りに陥らないように引続いて斬新な企画が用意されているが、今回初めて行なわれる購読者大会で寄せられる御希望、御意見はさらに本誌を充実させる資となることであろう。

本号では胃壁の微細病変の診断がとりあげられた。胃の形態学的診断領域がさらに一步前進したことを喜ぶと同時に、限らないこの道の深さを如実に知らされた思いがするのは筆者だけであろうか。読後に一層の目標点が得られれば幸である。

早期癌症例も又々教えられるところが多く、次々と珍しい症例の連続で、汲めども尽きせぬ感が深い。

やがて、本誌の主題の一つになるであろう領域から、本号では秋田教授に胆石について御執筆いただいた。

座談会、胃微細病変の診断は、広島での秋季学会のシンポジウム演者の、いわばPTAを中心に行なったものである。診断にたずさわる1人1人の勢一ぱいの厳しさと、チームワークの重要さをお汲みとりいただきたい。

本号の先輩訪問では、川島前理事長にお話をうかがったが、後進への励ましと御期待に応えるべく、さらに充実を期したいものである。

<田 中 弘 道>